


平成 29 年度 研究サマリー

研究会名称	日仏米心臓血管外科研究交流会	
代表者所属	京都大学大学院医学研究科	
代表者氏名	湊谷 謙司	
<p>研究方法・結果</p> <p>我々は本助成金により、末期腎不全患者に対する大動脈弁置換術における人工弁の選択に関する検討を目的とした後ろ向き多施設臨床研究を行った。高齢化社会に伴い、末期腎不全を含む全身合併症を有する心臓病患者が増加しているという背景を踏まえると、血液透析など末期腎不全合併患者における大動脈弁狭窄症などの病態に対して適切な人工弁（機械弁あるいは生体弁）を検討することは、心臓血管外科臨床上の大きな研究テーマである。</p> <p>我々は 2008 年から 2015 年における、国内 18 施設の計 491 例の血液透析患者への大動脈弁置換術患者の臨床データにつき検討した。2.5±2.1 年(最長 8.3 年)の観察を行った。39 項目の因子につき、Cox 回帰分析にて検討した。</p> <p>全症例のうち、168 例が機械弁 (group M)、323 例が生体弁 (group B) であった。全手術死亡 (group M: 8.9%; group B: 12.1%; p=0.29)、5 年生存率 (group M: 50.4%; group B: 39.3%; p=0.42)、出血イベント (group M: 70.0%; group B: 75.0%; p=0.65)、血栓塞栓イベント (group M: 94.3%; group B: 92.9%; p=0.64)、5 年までの再手術 (group M: 97.8%; group B: 97.1%; p=0.88) において、両群に有意差を認めなかったが、傾向スコアを用いた解析では、機械弁において弁関連死亡が生体弁に比べて高値であった (HR 2.12, p=0.04)。</p> <p>上記の結果は、末期腎不全患者における生体弁使用が手術死亡を増すことがなく、さらに弁関連死亡を減少させる可能性を示す。手術リスクの高い血液透析患者における人工弁選択におけるエビデンスを示したことは、手術成績向上につながる、大変意味のある医学研究成果であるといえる。</p>		
<p>研究成果 (論文、学会発表、雑誌掲載等)</p> <p>1. Taro Nakatsul, Kenji Minatoya et al. Outcomes of Aortic Valve Replacement with Bioprosthetic or Mechanical Valves in End-Stage Renal Disease Patients. 97th American Association for Thoracic Surgery Annual Meeting, ADULT CARDIAC MODERATED POSTER COMPETITION. April 29, 2017 - May 1, 2017, Boston, USA.</p>		